

書 燈



(右) 平成28年度読書週間行事
白井操氏講演会「一粒の豆から幸せを」



(左) 中央図書館 読書週間児童書の展示
「まめ商店街」へ、いらっしやい

私と本、図書館

三 谷 忠 弘

図書館に異動して来て、半年余が経過したが、異動に際しての内示を頂いた時の違和感は相当なものだったことを覚えている。図書館というものが市の中の組織にあったのか？が最初の思いだったと記憶している。内示書をよく見ると、冒頭に教育委員会とあるのを確認して、それでまずは納得した。前の職場での上司との面談において、希望する異動先の一つとして教育委員会はあげていたので、まずは希望したところだった、という印象であった。

これまで図書館との関わり合いのない人生を送ってきたものとしては、図書館とは何か、が最初に頭にもたげた疑問であった。

私自身の図書館との関わり合いは、これまでほとんどない。かすかに記憶にあるのは、大学で卒業論文を書くために図書館に先輩方の論文を探しに行ったこと、それと前職場の近くにあった灘図書館に時々寄って本を借りたことくらいである。特に大学に入るまでは、図書館という単語は私の辞書にはなかった。私が高校生までを過ごした田舎に当時図書館があったのか、疑問である(今はある)。それほど薄い関係しかない中でも、本とは小さい時から関係はあった。教科書という本である。つまりは、私の高校生までの中で本と言えば、学習参考書や教科書しか無く、絵本は無論、小説や図書館というものの存在はなかった。

それが少し変わってきたのは、大学進学だ。初めて

大学図書館に意識がいき、教科書以外の本にも意識が向きだした。それ以来の本との付き合いは、何故か本屋さんがほとんどであった。大学の生協や駅前の本屋さんで本を買ったり、古本屋を訪ねたりすることで、本を所有することにある種の満足感を感じるようになった。買っても読まないことも多く、もったいないという感覚や財布の事情で買わずに我慢することも多かったが、ただそういう時にも、これまで図書館を利用するという選択肢はほとんど頭に浮かばなかった。

そういう人生を送ってきた人間が、図書館とどういう関係を持てばいいのか、少しだけ悩んだ。ただ本を読むのは好きか？と問われたら、回答には困るものの、買うのは好きだということは今も変わらない。そんな思いから何とかなるか、という気持ちで今はそんな悩みは既に解消している。

今の本との付き合い方は、図書館で本を借りて、気に入ればその本を買うという接し方になり、雑誌に関しては借りることが難しいので、未だに相変わらずだが、それ以外の本は図書館のおかげで、買うだけで読まずに「積ん読」するのは随分と減った。

いずれにしても、現在は図書館像が大きく変化している最中であり、むしろまったくの白紙の頭であれば、市民の感覚で物事を考えられるのではないかと、という思いで、今の図書館の職責を全うしようと思っている。
(中央図書館総務課長)

NACSIS-CAT/ILL の再構築計画について

高橋 一郎

1. はじめに

NACSIS-CAT/ILL は、国立情報学研究所が運営するネットワークサービスである。その内容は、書誌情報と所在情報の共有システムである NACSIS-CAT と、電子メールを用いて文献複写と相互貸借を効率化する NACSIS-ILL によって構成される。

参加する図書館等の数は、平成 27 年度末において 1,274 に上るが、その大半を大学図書館が占め、公共図書館の参加は稀である。しかし、神戸市立中央図書館については、市内の大学図書館と共同で「神戸市図書館情報ネットワークシステム」を構築し、書誌情報を共有していることから、参加館として名を連ねている。

現在、この NACSIS-CAT/ILL について、平成 32 年のシステムリプレースに合わせた再構築が検討されている。検討作業は、平成 24 年に設置された「これからの学術情報システム構築検討委員会」によって進められ、その過程は同委員会のウェブサイトにおいて公開されている。

また今年 5 月には、国立情報学研究所の主催する「学術情報基盤オープンフォーラム 2016」において、「2020 年の NACSIS-CAT/ILL」と題し、参加館に対する計画案の説明が行なわれた。さらに 7 月には、「NACSIS-CAT/ILL の軽量化・合理化について（基本方針）」が確定し、計画の方向性が明示された。

まだ、具体的なスケジュール等は決まっていないが、今回の再構築が NACSIS-CAT/ILL のあり方を大きく変えることは間違いない。そこで、既に公開されている情報に基づき、再構築計画の要点を紹介する。

2. 外部機関作成データの活用

NACSIS-CAT では、オンライン共同分担方式が採用され、参加館が作成した書誌によって、データベースが構築されている。従って、その品質を維持するため、各館の担当者には、規則に則った正確な書誌を作成することが課せられている。

しかし、参加館における職員体制の変化に伴い、こうした運用の継続が難しくなり始めている。文部科学省の統計によれば、大学図書館における目録担当者の人数は、過去 30 年以上に渡って減少し続けている。さらに、その内訳を見ると、専任職員数に比べ、臨時職員数の割合が高くなっている。その結果書誌作成に必要な知識を持つ図書館が少なくなり、一部の参加館へ書誌作成の負担が偏重する状況となっている。

こうした事態を解消するため、再構築後は、国立国会図書館の提供する JAPAN/MARC や、書誌作成事業者による民間 MARC など、複数の外部機関作成データを、NACSIS-CAT へ自動登録することが計画されている。これによって、参加館の担当者が書誌を作成する必要性が減り、大幅な省力化を実現できる。

ただし、外部機関作成データを活用するためには解決すべき課題もある。そこで再構築計画では、後述の対策が案出されている。

3. 書誌データのフラット化

NACSIS-CAT においては、『日本目録規則 1987 年版改訂版』、および『英米目録規則第 2 版』（Anglo-American Cataloging Rules, 2nd edition）に準拠したコーディングマニュアルが用いられ、書誌単位のデータが作成されている。書誌単位とは、出版物の物理的な単位に関わらず、資料に付されている「固有のタイトル」をデータ作成の基準とする考え方である。シリーズ名についても個別の書誌データが作成されるが、上下などの巻冊次や、正統のような部編名は、「固有のタイトル」と見なされず、書誌データ内に出版物理単位の数だけフィールドを繰り返す「VOL 積み」という記述法で表現される。

一方、JAPAN/MARC や民間 MARC は、出版物理単位によって作成されている。出版物理単位の場合は、ひとつの出版物に対して 1 件の書誌データが作られる。容易に理解でき、資料の流通とも一致するため、出版業界や公共図書館において使用されている。

このように NACSIS-CAT は、一般的な書誌データと異なる構造を持ち、そのことが外部機関作成データの活用を妨げる要因となっている。

そこで、NACSIS-CAT の書誌作成単位を出版物理単位へ変更することが計画されている。再構築計画では、これを「書誌データのフラット化」と呼ぶ。

また現段階では、既存の書誌データの扱いは、検討課題とされている。「VOL ばらし」と呼ばれる出版物理単位への機械的変換も考えられているが、実施は未定である。仮にフラット化の対象が新規データのみとなった場合、システムリプレースに先行して、書誌作成単位が変更される可能性もある。

書誌データのフラット化は、参加館への影響も大きい。ローカルシステムの多くは、現行の NACSIS-CAT と同じ書誌構造を持っている。再構築にあたっては、後方互換性を確保することが明言されているが、参加館が独自に書誌単位の構造を維持する利点は乏しい。各図書館においても、書誌構造の変更やローカルシステムの改修が進むことになるだろう。



4. 名寄せ機能の導入

現在、NACSIS-CAT のデータベースにおいては、同一資料に対する書誌データの重複が認められていない。そのため、同じ資料を所蔵する全ての参加館の所在情報が、ひとつの書誌データに集中する。

しかし、再構築後のデータベースには、複数の外部機関作成データが混在することになるため、書誌データの重複が前提となる。効率的な資料共有を図るためには、何らかの方法で所在情報を一元化する必要が生じる。そこで、タイトルや出版者などを比較し、機械的に書誌データを同定する、所謂「名寄せ」の機能を導入することが計画されている。

名寄せ機能の導入目的は、外部機関作成データへの対応だけではない。例えば、新規に書誌データを作成する場合、現在は重複書誌の発生を防ぐため、統一された記述法に沿うことが求められている。しかし、書誌の重複が許容されるのであれば、各館独自の判断による記述も可能となる。また、書誌を修正する際に行なわれている「レコード調整」と呼ばれる参加館同士の協議についても、書誌修正の必要性がなくなるため不要となる。このように、名寄せ機能の導入は、参加館の負担軽減に結び付く。

なお、書誌データの同定結果は、NACSIS-ILL や検索サイト CiNii など、所在情報を提供するサービスの質を左右する。そのため、名寄せ機能には、高い同定精度が求められる。再構築計画においては、十分な検証と慎重な導入が予定されているが、導入後の再検証や調整等も、今後の課題となるだろう。

5. まとめ

今日の図書館界は、書誌情報に関する大きな転換期を迎えている。既に、英語圏における標準的な目録規則は、平成 22 年に発表された「RDA」(Resource Description and Access) へ移行している。また、国内においても、国立国会図書館収集書誌部と日本図書館協会目録委員会が協力し、平成 29 年の公開に向けて、「日本目録規則」の改訂作業を進めている。

これらの新しい目録規則は、インターネット環境における書誌情報の利用を想定しており、ウェブ上のデータを共有するための LOD (Linked Open Data) と呼ばれる技術の普及にも呼応している。

NACSIS-CAT/ILL の再構築も、こうした潮流と無縁ではない。外部機関作成データを活用する計画の先には、さらなる外部サービスとの連携が見据えられている。これからの NACSIS-CAT/ILL には、より広範な情報社会とのつながりが期待される。

(資料係)

〈新規採用職員エッセイ〉

基本を学べる場所

吉田 綾音

「利用者を知り、資料を知り、利用者と資料を結びつける」これは、図書館員の基本として言われている言葉です。自動車図書館の担当となって、自動車図書館の仕事はこの言葉を体現しているなあと感じています。

図書館で働き出して半年以上が経ち、初めの頃は仕事をこなすことに精一杯でしたが、やっと周りを見る余裕ができました。そのおかげか、巡回先がどんな場所か、どんな利用者が多いのか、どんなジャンルの本が多く借りられているのかなど、少しずつですが分かるようになってきました。さらに、利用者の顔を覚え、コミュニケーションをとることで好みや要望を知ることも増えています。こうして「利用者を知る」ことで、自動車図書館に載せる本を選ぶ際や、選書リストから本を選ぶ際に、役立て、反映させることが出来るようになってきました。自分が選んで書架に並べた本が、利用者に借りられていくのを見ると、うれしさと同時にやりがいを感じます。

また、利用者の方から「〇〇関連の本を何冊か」とか「〇年生への読み聞かせの本を」と言われることがあります。これは図書館員の腕の見せ所だと思います。たくさんの資料の中から、その人に合わせて、どのレベルでどんな内容の本を選ぶかということは、多くの資料を知らなくては難しいことです。ただ、私はこの「資料を知る」ということがまだまだ足りていません。さまざまな資料の知識を身につけて、利用者にあった、よりよい本を提供できる図書館員になることが、今の目標です。

私にとって自動車図書館の仕事は、図書館員としての基本を学べる場所です。図書館を利用しづらい地域や人たちのところを巡回し、本を届ける自動車図書館は、まさに目に見える形で、利用者と資料を結びつけています。しかし、その「利用者と資料を結びつける」ことの質を高めるためには、「利用者を知り、資料を知る」ことが大切だと思います。利用者との素敵な出会いの手助けをしていけるよう、日々勉強していきます。

(市民サービス係)



一図書館協議会第4期の終了および

第5期委員の委嘱について

9月11日に第4期委員の2年間の任期が終了し、「第4期協議の内容」をホームページに公開した。

9月12日に第5期委員が委嘱され、11月18日に第1回協議会が開催された。

《神戸市立図書館協議会第5期委員名簿》

区分	氏名	役職名
学校教育	篠原 亜紀	神小研図書館部部长
	大西 一人	神中研図書館部部长
社会教育 家庭教育	○一居 明子 森田 祐子 五井 雅史	「夕やけ文庫」所属 婦人団体協議会理事 PTA 協議会 家庭教育専門委員長
市民代表	大空 真希子 小林 佳代子	ネットモニターより選考 ネットモニターより選考
学識経験者	立田 慶裕 ◎安原 一樹 湯浅 俊彦	神戸学院大学教授 兵庫教育大学大学院准教授 立命館大学教授

任期 平成28年9月12日～平成30年9月11日

(◎は会長 ○は副会長)

(企画情報係・西山)

一シルバー人材センター連携行事

今回初めてシルバー人材センターと連携し、「生き生きシニアライフ～生きがいと健康～」(10/5～10/19)展を開催した。同センターの案内ポスターの掲示と「健康で充実したセカンドライフ」をテーマにして関連図書を収集し、展示を行った。展示図書155冊のほぼすべてが貸し出され、利用者のテーマへの関心の高さが伺えた。期間中にはセンターの入会説明会(10/13)も館内で催され、60名の参加者が熱心に耳を傾けた。(調査相談係長・大黒)

一夏休み期間中の行事

各館では、今年も夏休みの子供たちに向けた様々な行事を行った。中央図書館は、毎年恒例の「夏休み特別おはなし会」(協力:こうべ子ども文庫連絡会)に加え、調べ学習応援講座「自分の研究を本にしよう!」を開催した。参加者はまず自分の選んだテーマについて調べ、その後簡単な本作りを行い、研究成果を一冊の本にまとめた。兵庫図書館では「ゴーライブラリアン プチ体験」と題し、子供たちが一日図書館員となって本の貸出・返却やポップ作り、コーティング作業を体験した。また、北図書館では3回目となる兵庫県指定重要有形文化財「内田家住宅」での「藍那・小河カルタ」を用いた「北区 知っとこ!カルタ」を開催。市の学芸員による茅葺き民家や昔の暮らしに関する解説もあり、年齢に関係

なく楽しく地域の歴史を学べると好評を博した。須磨、西の各図書館では「親子新聞教室」を開いた。参加者は持参の写真を元に、レイアウトや見出しを決めて記事を完成させた。共催の神戸新聞社が、教室の様子を新聞にして印刷・配布した。垂水図書館では、マリンピア神戸さかなの学校と「垂水の浜の生き物と友達になろう!」を共催し、近辺の浜で獲れた生き物を紹介した。実際に生き物に触ったり、その後の工作会では自作の釣竿で魚釣りゲームを楽しむなど、親子連れで大盛況となった。

(利用サービス課担当係長・榊井、企画情報係・布川)

一白井操氏講演会「一粒の豆から幸せを」

平成28年度中央図書館読書週間行事として、神戸在住の料理研究家、白井操さんを講師にお迎えし、「豆」をテーマとする講演会を行った。

ご講演では、優れた豆の栄養価とそれを活かす調理の工夫が写真とあわせて紹介された。より楽しく健康で幸せに暮らすために家庭料理は大切とお話に加え、笑うことや周囲とのつながり、誰かのために何かをしたいという気持ちが日々の生活を豊かに支えている、そこからまた新しく楽しいことに踏み出してみてもよいくお話しいただいた。

参加者には簡単な試食と、黒豆とお米のお土産があった。会場は黒豆の香りと温かな雰囲気にもまれ、質問も途切れぬ中、和やかに会は終了した。11月5日開催。参加61名。(企画情報係・西山)

一神戸市暮らし体験事業「LIVE LOVE KOBE」

神戸市主催の移住促進プロジェクト「LIVE LOVE KOBE」の体験ツアーの1つとして、館内見学と製本ワークショップを行った。ワークショップは、製本室で糸綴じや背タイトルの箔押し等を体験しながら上製本を作成。本格的な仕上がりが好評だった。8～11月に10組12名参加。(資料係長・福永)

一手帳

- 人事 10.31 肥爪 忠(製本室嘱託)退職
- 会議 7. 8 図書館協議会
- 7.15 近畿公共図書館協議会理事会・総会
- 7.28～7.29 指定都市立図書館長会議
- 10.28 中央図書館職員安全衛生委員会
- 11.18 図書館協議会
- 研修 8.30～9.2 新任図書館館長研修
- 10.20 館内研修「『地域の情報拠点』としての図書館～ヨコハマライブラリーカフェの取組」
- その他 8. 1 神戸賀川サッカー文庫開室日 木・金・土へ変更
- 9.29 指定管理者選定評価委員会
(東灘・兵庫・北(北神)・新長田)
- 10. 3 外壁落下防止ネット工事完成
- 11. 1 神戸賀川サッカー文庫 全日開室